●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 7 - 4

2年生白書

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 6

1. 2年生の生活リズム …… 7

- 目覚めてから登校するまで …… 7
- 就寝 …… 11

2. 学校について …… 13

- 学校への態度 …… 13
- 先生との関係 …… 15

3. 子どもと学校外学習 …… 17

- 学習塾 …… 17
- おけいこごと …… 21
- 家庭学習 …… 21
- 親は勉強をみてやるか …… 24

4. 友だちと遊び …… 27

- 仲良しの友人 …… 27
- 放課後に遊ぶ子 …… 29
- 何をして遊んでいるか …… 31

5. 親子関係 …… 32

- 親子の接触 …… 32
- 親への依存と自立 …… 36
- 子どもに手を焼いている部分 …… 39

子ども研究ノート④
塾通い …… 深谷昌志 …… 41

資料1　調査票見本 …… 48

資料2　基礎集計表 …… 60

資料3　付録(1)～(6) …… 68

調査レポート／2年生白書

要　約

①調査の意図

直接子どもからのデータを入手しにくい小学2年生について、その成長過程における種々の心理的行動的特徴を浮きぼりにするため、母親対象に調査を行った。対象は小学2年生をもつ母親1,492名であった。

②学校への適応

毎日とても喜んで学校へ行く子は4割、「かなり喜んで行く」子も含めると、7割に近い子が、学校生活によく適応していることがわかる(図13)。

③子どもが話すこと

子どもが学校のことで何を親に話すかを見ると、①「運動会などの学校行事」②「友だちのこと」③「先生にほめられたこと」となっており、これが2年生の学校生活を支える要因となっているのかもしれない(図14)。

東京学芸大学教授　深谷和子

東京学芸大学大学院生　堀　真実

④先生との関係

「親より先生の言われたことのほうを聞く」子は「とても・かなり」を含めても56%と、現代っ子には先生の威信は昔ほどではなさそうだ(図16)。また先生と子どもの相性は、6割近くが、かなりうまくいっている、と答えられている(図17)。

⑤通塾率

2年生のうち17%の子が学習塾に、76%がおけいこに通っている(図18、集計表)。また現在通わせていない親も、半数近くが将来は学習塾に通わせるつもりと答え、小4、小5くらいが予定されている(図23、図24)。

⑥宿題への自発性

宿題についての自発性はこの学年ではまだ十分でなく、6割ぐらいしか大体にせよ自分から宿題にとりかかる子がいない(図29)。また子どもの勉強を、週に1～2日以上みてやる親は6割に近い(図32)。また勉強をみてやれる自信は、この学年では9割の親がもっている(図35)。

調査レポート／2年生白書

要　約

⑦仲良しの友人

一番仲良しの友人は8割が同クラスであり、7割の子は仲良しの子と家に帰ってからも遊んでいる(図37、図38、図39、図40)。しかし母親同士の行き来が多少あるのは、半数でしかなく、あとはあいさつをかわす程度の間柄のようである(図41)。

⑧熱中していること

2年生男子が今熱中していることは「ファミコン、プラモデル作り、野球、サッカー、水泳、シール集め」、女子は「ピアノ、読書、絵を描く、水泳、なわとび、そろばん」であるようだ（付録(6)）。

⑨親子関係

「とてもいい」「かなりいい」親子関係と答えている親は約半数。「ふつう」も入れるとかなり良好である(図47)。また親子の接触時間は「まあ」も含めて十分であるとする者は、母子間で8割、父子間で6割となっている(図48)。

調査概要

1.調査主題　2年生白書

2.調査視点　今までのアンケート調査はほとんどが小学4～6年を対象としたものであった。そこで低学年である小学2年生の子どもの成長の過程における特徴を浮きぼりにする。

3.調査項目　家に帰ってから一緒に遊ぶ友だち／家で話すこと／学習塾について／親がみてあげる勉強について／親子関係について／親の子どもへの

⑩親への依存

２年生はまだ十分親をたよっていて、その意味で、可愛らしい年齢であると言えそうである(図53)。

⑪子育ての評価と子どもへの不満

子育ての採点は一応まあまあとしながらも、うまくいっていない順に並べれば、しつけ、成績、性格、健康となる(図55)。また現在子どものしつけで手を焼いている内容については付録(9)に掲げた。

信頼度／子の親への依存度／子どもに望むこと
4.調査時期　昭和61年11～12月
5.調査対象　小学２年生の子どもを持つ母親
6.調査方法　学校通しによる質問紙調査
7.サンプル　小学２年生の子ども（男子801名、女子691名）を持つ母親1,492名

❋はじめに❋

小学生の意識と行動をめぐるデータバンクを企図して刊行され始めた『モノグラフ・小学生ナウ』も、7年目を終わろうとしている。と言ってもそのほとんどが、小学4～6年対象に行われたアンケート調査の結果をまとめたレポートであるが、最近になって、より低年齢の子どもたちのデータをとの声も寄せられるようになったので、この号を企画した。2年生対象のアンケート調査は精度の高いデータが得られにくいため、代わって母親を対象に、とくにテーマを設けず多くの領域にわたってデータを収集している。子どもの成長の過程の中で、2年生という学年がどんな学年なのかを浮きぼりにできたらと思っている。

1．2年生の生活リズム

2年生は、毎日どんな生活リズムで暮らしているのだろう。まずそれをざっと追ってみることから始めよう。

目覚めてから登校するまで

調査を実施したのは、昭和61年の11月下旬から12月上旬までで、東京都内とはいえ朝の冷え込みがかなり厳しい頃である。対象は、すべて公立小学校の子どもたちなので、学校に行くまでにかかる時間は、せいぜい20分程度と思われる。これらの状況を頭に入れた上で、以下の図を見ていこう。

2年生の平均的な朝の様子をスケッチしてみると、まず3分の2の子が7時くらいに(図1)、しかも8割の子が母親に1度以上「起きなさい」と声をかけられて(図2)起床し、着替えの段階でもまだ65%が親に催促されて(図3)やっと着替えている。

その後7時半ごろには、やはり全体の3分の2が朝食をとっている(後出の集計表)。そして起床から朝食までの時間は図4のように、15分以内が3割、20分から30分が6割という短時間で、それ以上間をおいて食卓につく子はわずか1割でしかない。いかに現代っ子たちが朝寝坊か、いかに朝の時間があわただしいかが浮かんでくる。

したがって朝食は全体に食欲不振傾向にあり(図5)、「とても食欲がある」子はわずか1割。全体が「まあまあ」の状態。逆に、食欲が「あまり・ほとんどない」子は2割を超える。朝食の献立は集計表によれば、4割

図1　起床時間

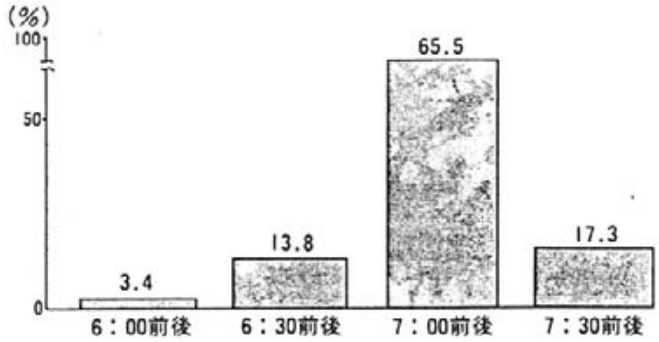


図2　朝の目覚め

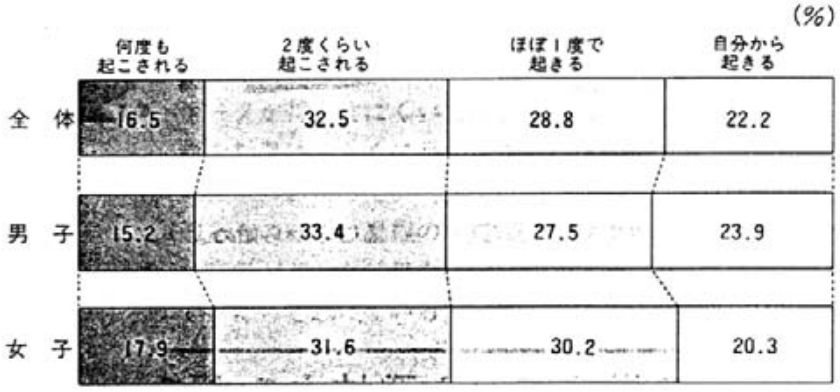
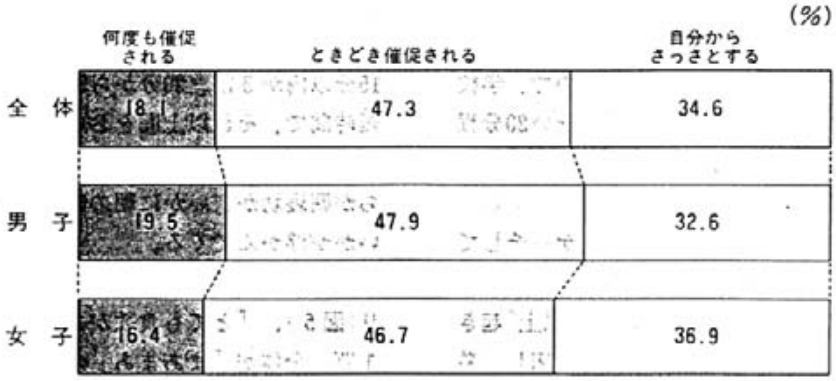


図3　朝の着替え



がほぼ和食(ごはん)、3割が洋食(パン)スタイルで、図6によれば「朝食抜きで登校することがまったくない」子が75%と、食欲がない割にはきちんと食べている。母親の努力だろうか。しかし「いつも・わりと朝食抜き」の子が1%。これに「ときどきそう」の4%を加えると、数字は5%になる。1クラスに2人はいる勘定で、少ないと言えば少ないが、しかし逆にこの層の母親に何らかの助言をすることができないものか。

食欲の話が出たところで、ついでに子どもの偏食についてもふれておこう。図7によると半分くらいの子どもたちには、「どうしても食べない食品」はないようだし、残りの子どもも、あってもせいぜい1～3種類というところで、この年齢の子どもは思ったより偏食が少ないようである。

さて、朝食を終えていよいよ登校となる。図8によると、親に言われなくても自分から家を出る子が6割にも達している。ただし「何度も言われないと遅刻してしまう」子も1割はいて、少数ではあってもこの点で手を焼いている親たちの姿も見られる。

また登校するときに、一番気にかかる忘れものについて図9に示した。85%の子どもたちは、だいたい自分で忘れものをしないように気をつけている。男子のほうが、親任せの子が多く、女子のほうがややしっかりしていると言えそうだ。

図4　起床から朝食までの時間

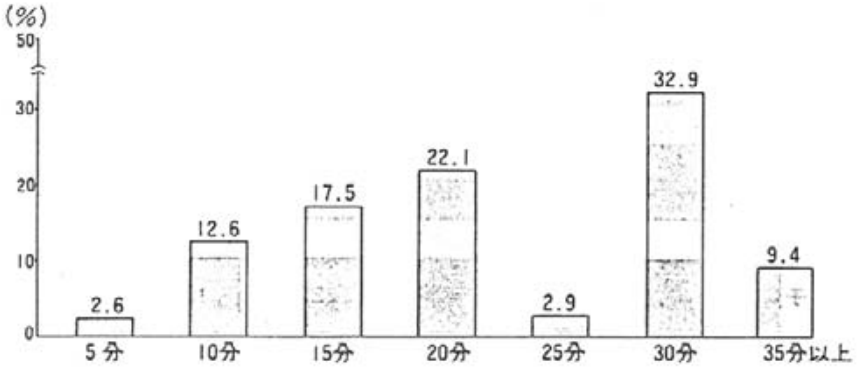


図5　朝の食欲

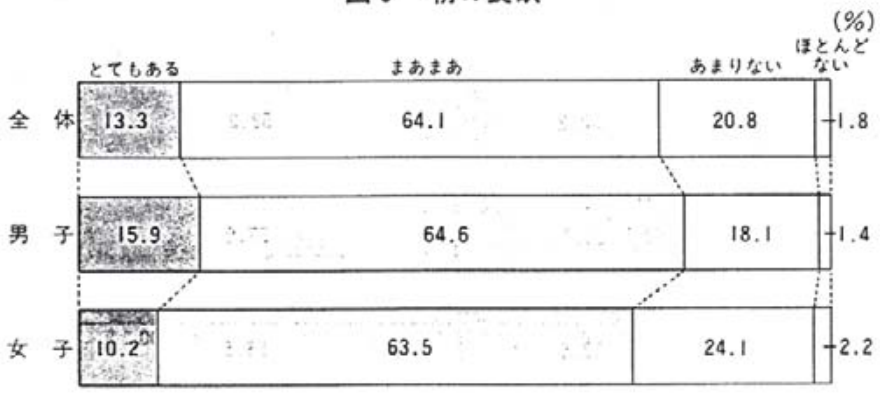


図6　朝食抜きで登校することがあるか

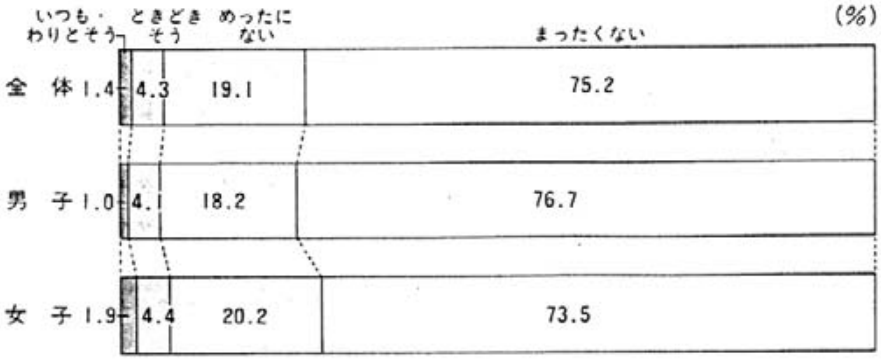


図7　偏食・どうしても食べない物の数

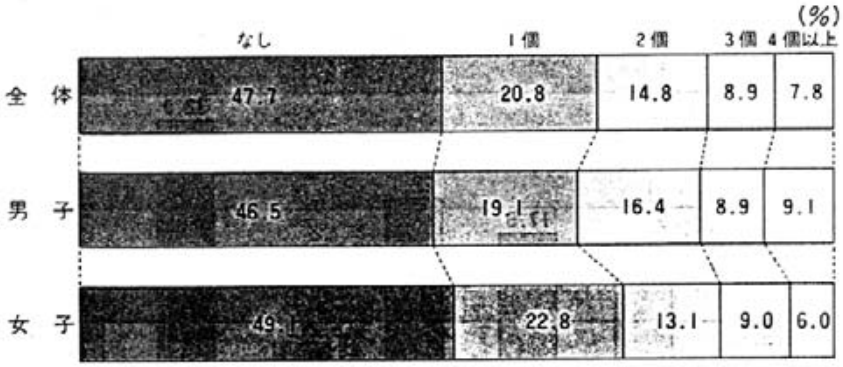


図8　遅刻しない時間に登校するか

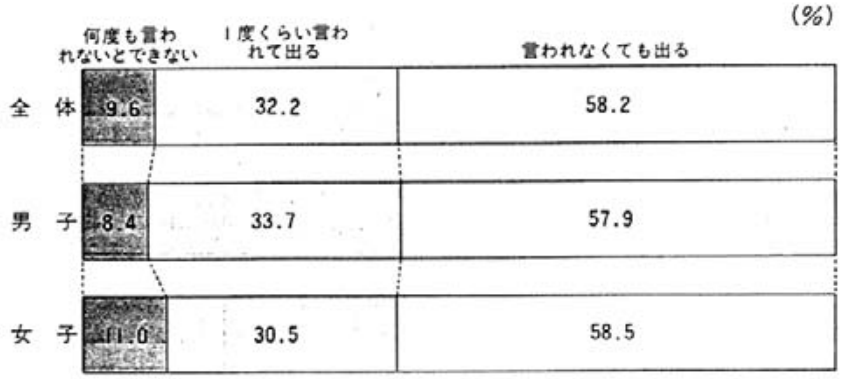
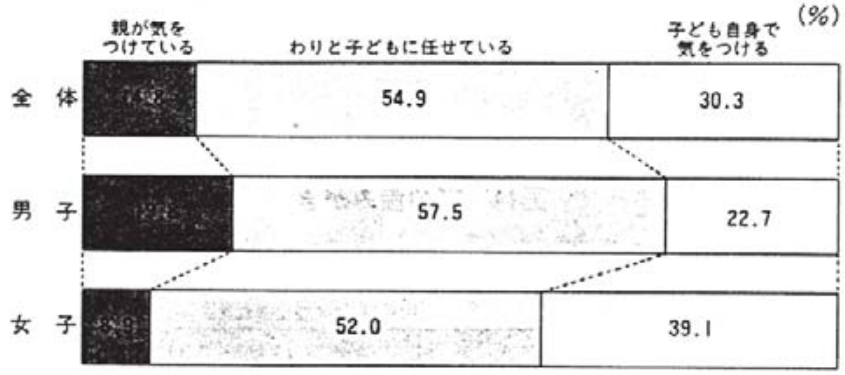


図9　忘れものをするか



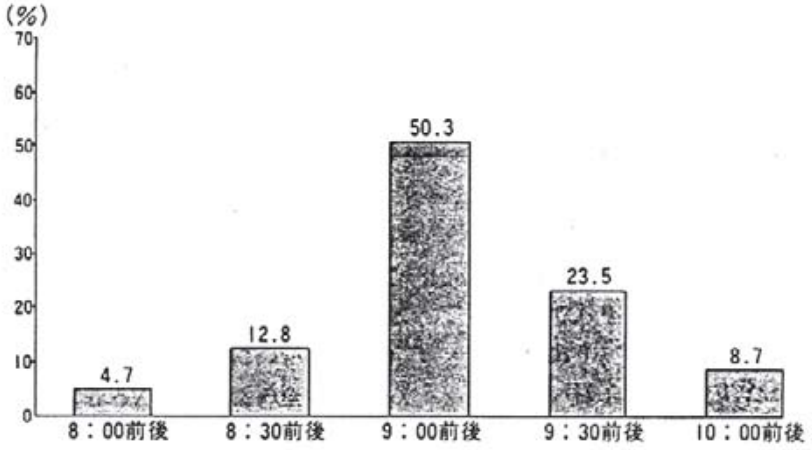
就寝

先に2年生の66%が7時頃に起きるという朝寝坊ぶりを見てきたが、では彼らが就寝するのはいつ頃か。

図10によると9時頃が全体の半分。それ以前がざっと2割、それ以後が3割、という状況である。筆者の1人は子ども時代、よく親からも先生からも「8時には寝なさい」と言われて育った記憶がある。もう半世紀近くの昔だが、ほぼ1時間が時の流れと共に後へズレ込んだのかもしれない。

生活リズムを見てきたついでに、歯みがきについてもふれておこう。夜の歯みがきにつ

図10　就寝時間



いて示したのが図11である。朝の歯みがき（図12）と対比させると、夜のほうが自分から歯みがきをする子がやや多い。朝のあわただしさとは違って、夜のほうが時間的な余裕があるからだろうか。また少し気になるのは、朝、夜とも歯をみがかない子が約1割、いることである。まさか朝も夜もみがかない子はいないだろうが、この子の親たちは、催促すらもしないのだろうか。

図11　夜の歯みがき

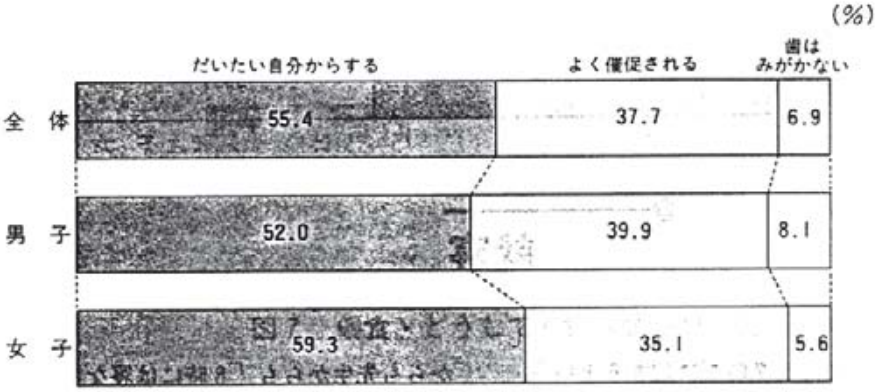
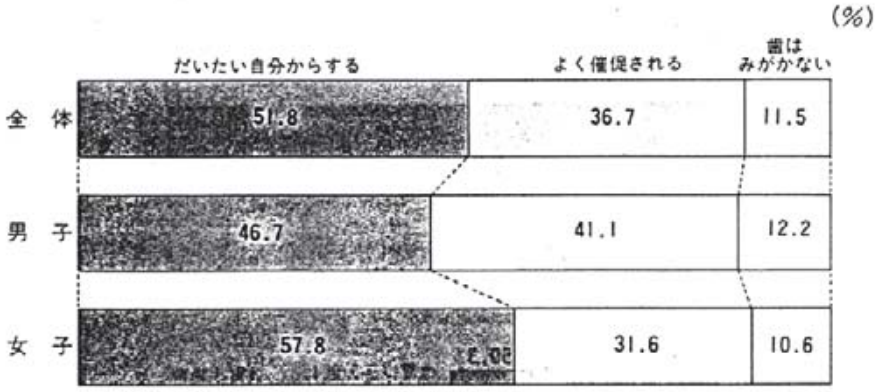


図12　朝の歯みがき



2. 学校について

この章では、親の目から見た子どもの学校生活への適応状況を扱っていくことにしよう。

学校への態度

まず図13は、学校生活への適応状況を推測させるデータである。毎日「とても喜んで学校へ行く」子は約4割。「かなり」も含めると7割に近い子にとって学校は楽しい場所になっているようだ。しかし「まあまあ」の数字の3割はちょっと気になるし、むろん「少し・非常に嫌がっている」子の存在(1%)はもっと気にかかる。ふつうこうした数字を扱っていく際に「まあまあ」は大過のないほうに読み取るのだが、学校への適応については違うのではないか。むろん学校生活の全てがハッピーとはいかないとしても、学校は全ての子どもに「かなり喜んで行く」場でなければならないだろう。とすれば、この「まあまあ」の数字にはある種の不適応の匂いも感じられる。何らかの対応が必要ではなかろうか。

ではその学校生活の中で、子どもは何を楽しいと思っているのだろう。ここでは「学校の出来事のうち何を親に話すか」という角度から、子どもの関心事を探ってみた。

図14に示したように、子どもたちの楽しみは「運動会などの学校行事」と「友だちとの遊び」であり、加えて「先生にほめられること」であり、授業についてはあまり話題にしていない様子である。したがってすでに見てきたような、学校に必ずしも喜んで行っていない子どもたちには、学校生活のこの部分に何らかの改善をはかってやることが大切では

なかろうか。すなわち楽しい行事を工夫し、友だち関係に配慮してやり、先生がその子、またはクラス全体を、もっとほめてやることなど、案外単純で日常的なことの中にカギがあるのかもしれない。なお図が示すようにどの項目でも男子より女子がより多く話している。

図13　登校の様子

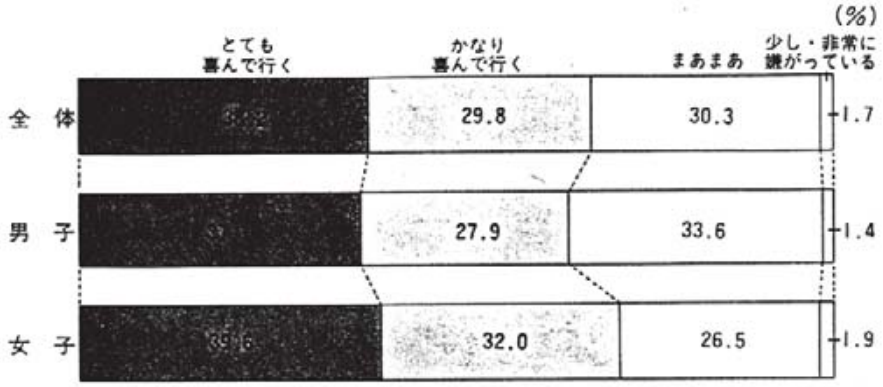
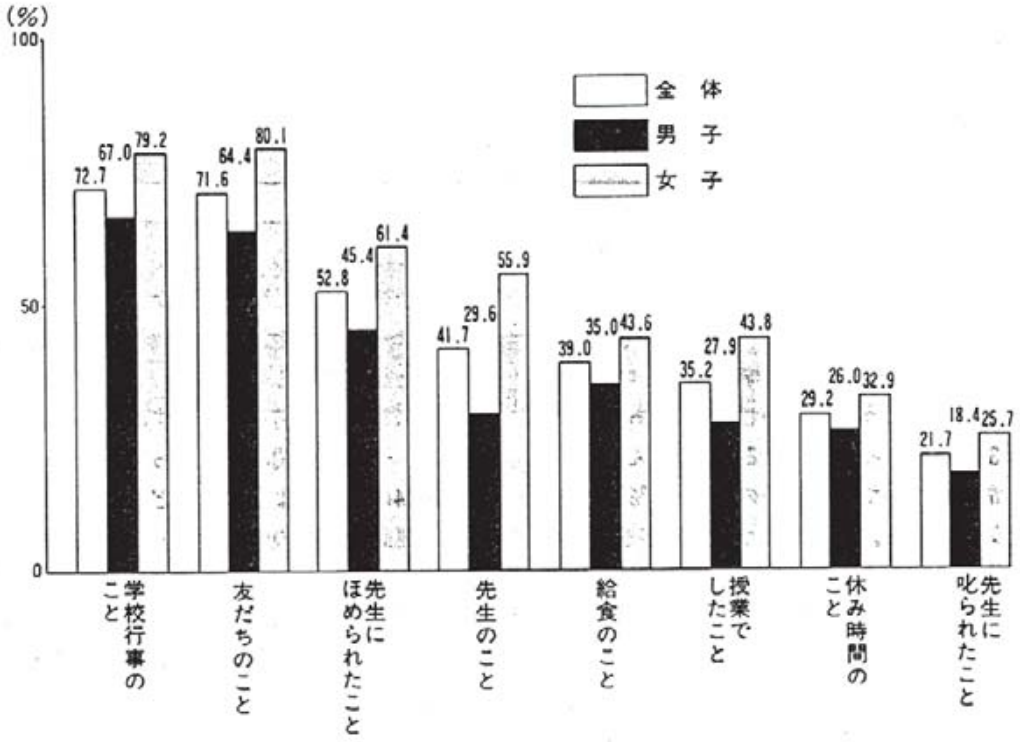


図14　学校について話すこと



「しょっちゅう・わりと」話す割合

先生との関係

学校生活への適応の中で、友人や授業と並んで重要な要件の1つに、先生との関係が考えられる。図14でも「先生にほめられたこと」が3位、「先生のこと」が4位にあがってきているのは、すでに見た通りである。

ここでそうした「先生」との関係について少し追ってみることにしよう。まず図15は、「先生の言われたこと、されたことを帰ってから細かく話すか」をみたものである。全体では、4割の子どもが、「とても・わりと」話している。ただし、男女差が大きく、男子では3割弱、女子では5割以上であり、また逆に2年生という低年齢でも、すでに「あまり・ほとんど話さない」女子が2割もいることにも注目しておくべきだろう。それがどういう心理から生じた数字なのかは不明だが、この点に関係を持つかもしれない先生への尊敬度を、次に見てみることにしよう。

図16は「親より先生の言うことのほうを聞くか」どうか、を見たものだ。この点で昔の子どもにとって先生は、いわば神様以上の存在であったような気がする。それを思って親たちはPTAの時などに「先生、ギュッと叱ってやってください」などと注文を出すのだろう。しかし図が示すように「とてもそう」は14%だけ、「かなりそう」を合わせても56%と半分強にすぎない。先生の威信も現代っ子にとってはそれほど発揮されていないと言えそうだ。

最後に図17は、「先生との相性」である。これは本当は「お子さんは担任の先生を好きですか」とたずねたかったのだが、種々の事情からこうした表現にとどめたものだ。全体の6割近くの子どもと先生の間はかなりうまくいっている。満足すべきものではないが「まあまあ」と表現されている分とを合わせると、ほぼ9割である。例によって女子のほうが満足度が高いが、とにかく全体としてこの時期の子どもの担任との関係は、良好であると言ってよさそうだ。

図15　先生の言われたこと、されたことを細かく話すか

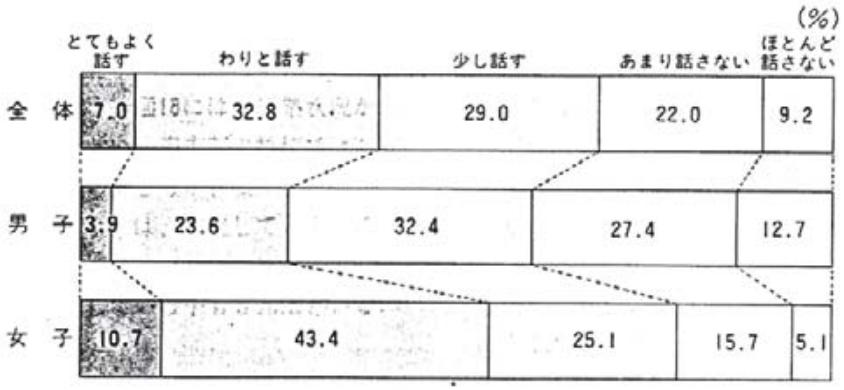


図16　親より先生に言われた場合のほうが言うことをきくか

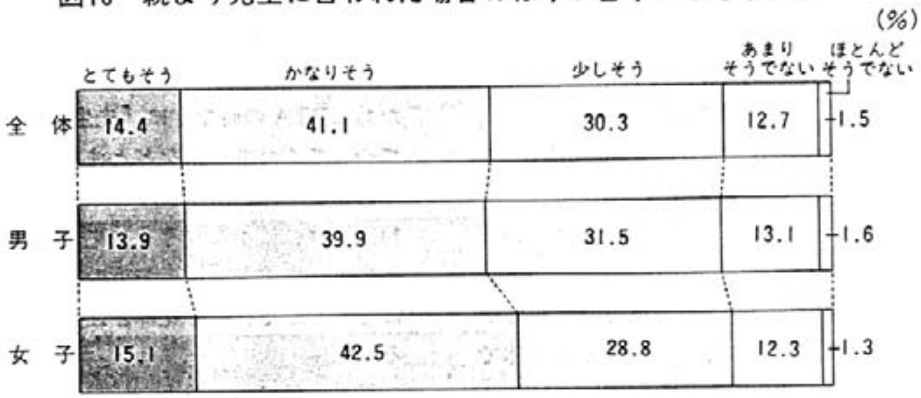
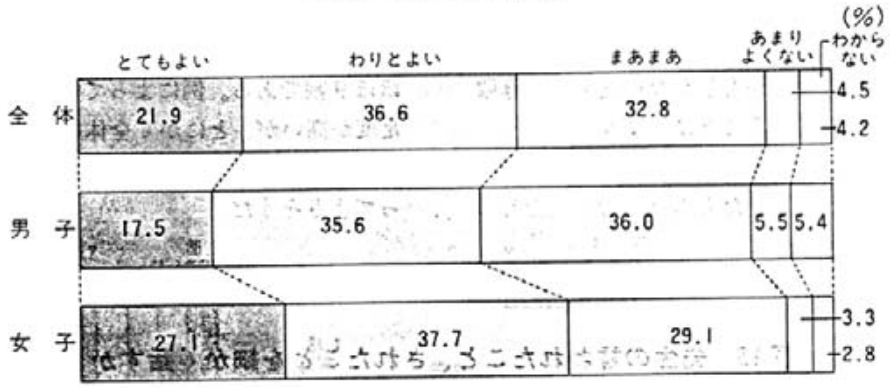


図17　先生との相性



3. 子どもと学校外学習

いつの間にか子どもの放課後は、子どもにとっての自由時間ではなくなってきているし、同時に親が子どもを自分たちの手にとり戻す時間でもなくなってきているのではなかろうか。ここではまず子どもの放課後にさす学校の影、とでも言うべき部分から見ていこう。

学習塾

一昔前は、学習塾と言えば、せいぜい中学生になってから通うものだったが、現在の2年生はどうだろう。図18には、通塾状況が示してある。東京という都市部の数値ではあるが、すでに17%の子どもが、塾に通っている。

そして図19によれば、通塾している子のうち一番多いのは週2日だが、中にはすでに4日以上塾通いをしている子も5%ほどいるのである。

その塾に子どもは積極的に行っているのだろうか。図20が示すように「かなり・わりと喜んで行っている」子は全体の4分の3。しかしあまり行きたくないのに行っている子も4分の1ほどいる。また図21は、通塾のきっかけである。「子どもから望んで」「親がすすめて」がほぼ半ばしている。また図22は、親が通塾をすすめた理由である。全体としては「もっと成績をよくするため」が1位。次いで「親がみてやるひまがない」「なんとなく」と続く。とくに受験や成績が下降したからというより、世の中全体の上昇志向に巻き込まれている感じのする数字のように思われる。

また図23は、現在学習塾へ行っていない子の親に、今後の予定をたずねたものだ。現在

図18　通塾率

図19　週に何日塾に行っているか(通塾者のうち)

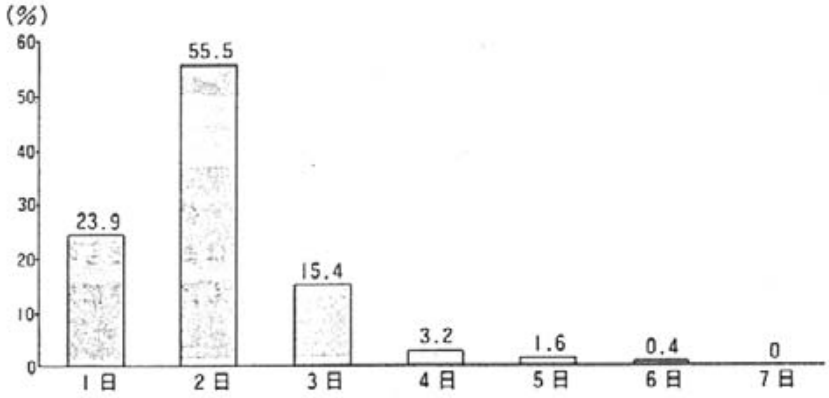
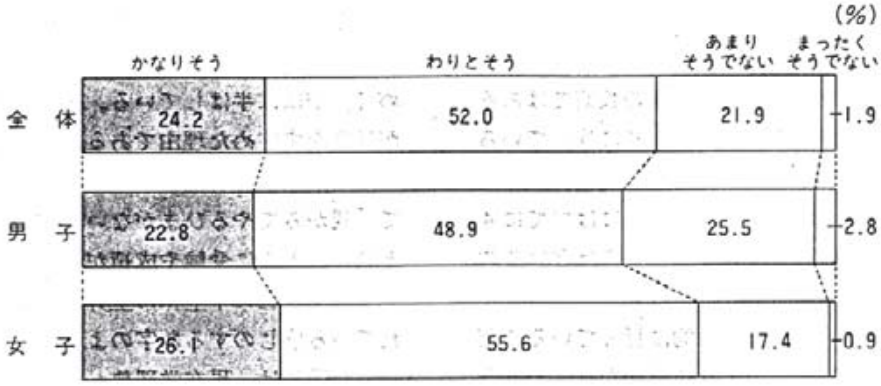


図20　学習塾に喜んで行っているか



通塾していない８割強の親たちも、約半数近くが「将来は行かせるつもり」と、すでに現時点で答えており、また図24によれば、小４、小５までにはかなりの者たちが通塾を予定しているようである。

図21　学習塾に行くようになったきっかけ

図22　親が塾をすすめた理由(複数回答)

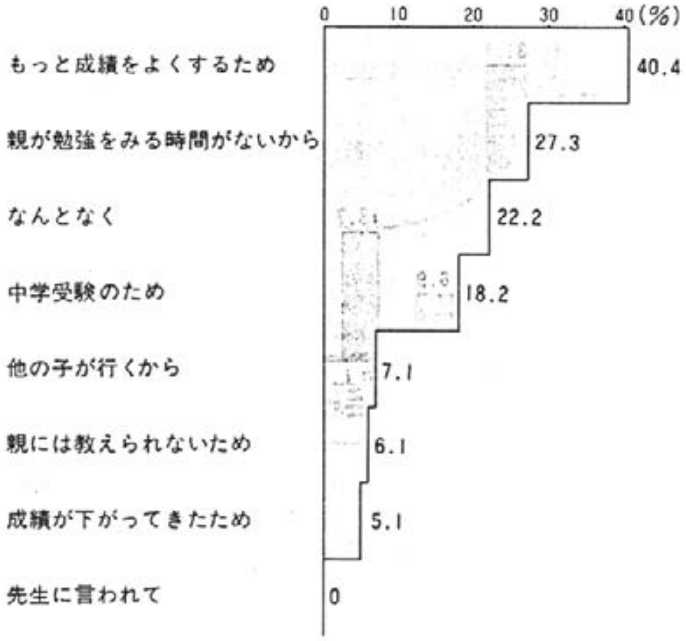


図23　今後学習塾に行かせるつもりがあるか(行っていない子の親)

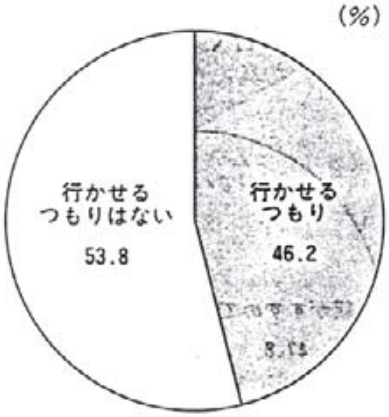
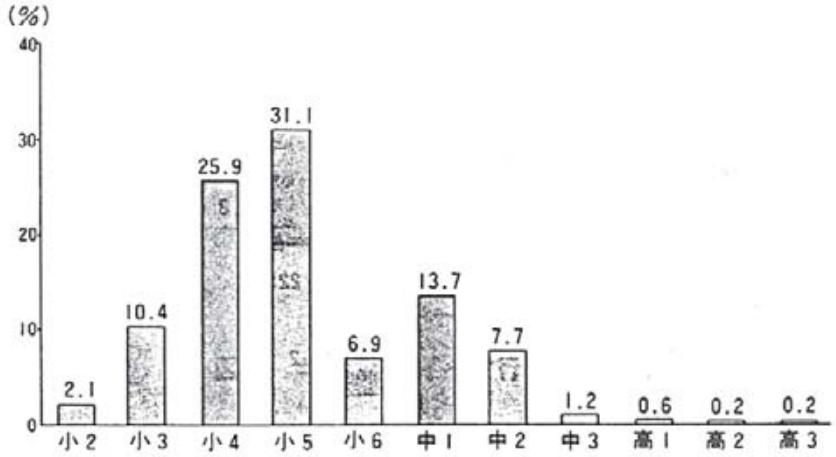


図24　今後いつから塾に行かせるか(行っていない子の親)

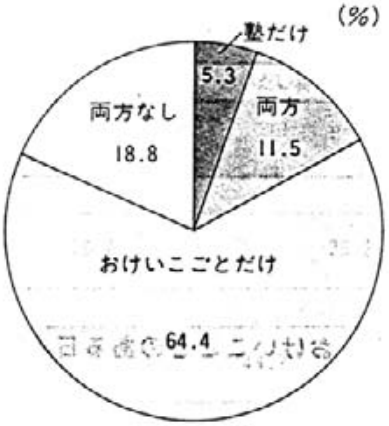


おけいこごと

同様におけいこごとについてもたずねてみた。スペースの関係で図は省略するので、必要に応じて巻末の集計表を参照されたいが、おけいこごとに行っている子は全体の76％（男子71％、女子81％）で、習っている子は1種類が43％、2種類が38％、それ以上も19％いる。当然週1日か2日がほとんどである。また現在おけいこごとをしていない子のうち、「将来行かせるつもり」は4割、時期としては小3と中学とにピークがある。内容については巻末の付録(7)(8)を見ていただきたい。

また図25は学習塾とおけいこごとのどちらに行っているかを見たものだ。現在まったく何もしていない子は、わずか19％にすぎず、ほとんどの子がいろいろとやっている。最近の子どもたちは非常に多忙と言われるが、その姿をほうふつさせられる数字である。

図25　学習塾とおけいこごとのどちらに行っているか



家庭学習

昔の子どもたちと違って、今の子どもたちの放課後は、学校が終わった時に始まるわけではない。塾やおけいこなど、第二の学校が終わった時刻に、本当の放課後がやってくるのだろう。しかしこの表現もまだ正確ではないかもしれない。家に帰ればまだ家庭学習がしっかりと子どもを待っているからである。

その家庭学習だが、図26、図27は、塾やおけいこごとのない日とある日に分けて、それにかける時間を見たものである。さすがに塾などのある日は宿題だけか、勉強しても30分以下がほとんどになっている（しかし高学年になると、塾があってもなくても、家庭学習の時間は変わらなくなっていくことが、他の

調査データではみられる。2年生はその点で塾といっても、家庭学習を他の場所でしているようなものなのかもしれない)。

ついでに図28はテレビの視聴時間である。家庭学習と比べると、何倍もの時間が費やされている。2時間以上見る子の割合は44%にものぼっている(好むテレビ番組については付録(5)に掲げた)。

また図29は宿題に対する自発性である。「だいたい」も含めて自分から宿題にとりかかる子は、2年生ではまだ6割しかいない。また図30はドリルの所有率、図31はそれを自分から進んでやるか、である。この年齢ではドリルを進んでやる子は3割しかいないことがわかる。

図26　塾・おけいこごとのない日の勉強時間(宿題含む)

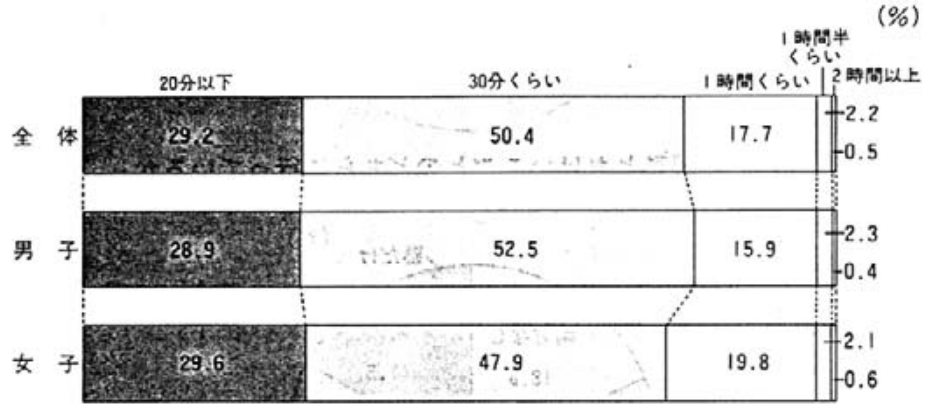


図27　塾・おけいこごとのある日の勉強時間

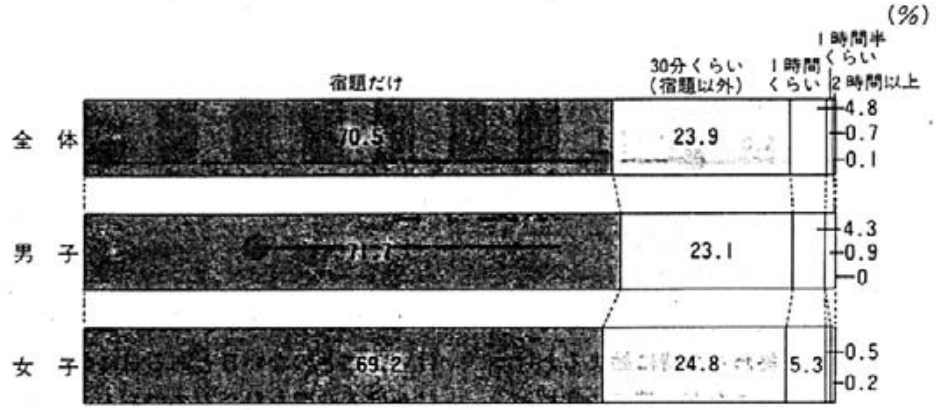


図28　1日のテレビの視聴時間

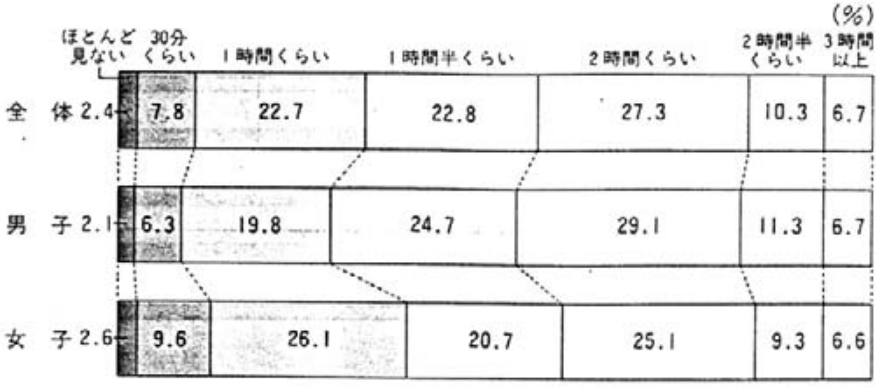


図29　親に言われなくても宿題を自分からするか

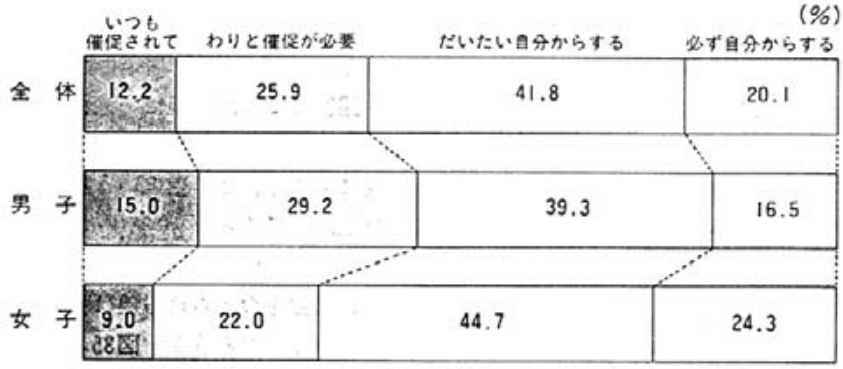
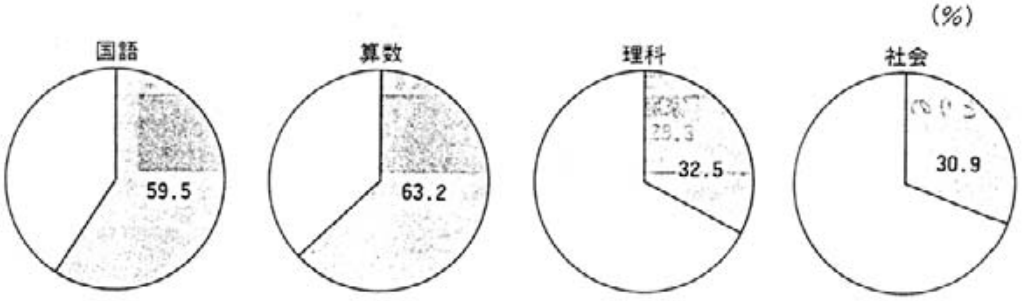
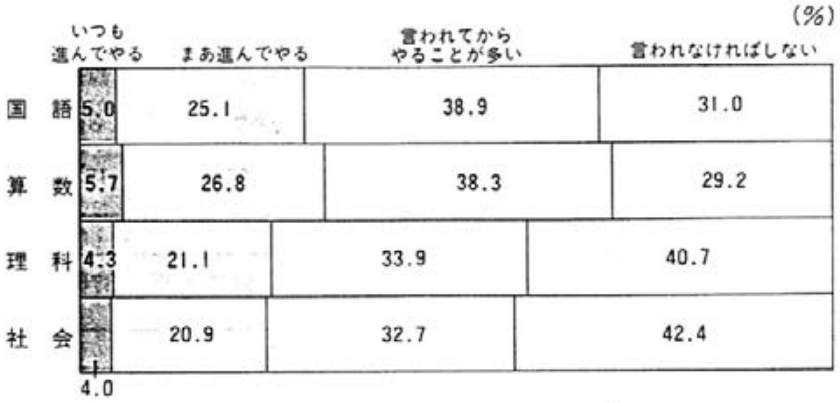


図30　ドリルの所有状況



「持っている」割合

図31　ドリルを進んでやるか



親は勉強をみてやるか

まだそれほど自発的でないこうした家庭学習に、親たちはどのくらいかかわっているのだろう。

図32によれば、「ほとんど毎日」みている親が16%、「週に３～４日」みる親が19%、「週に１～２日」はみる親を合わせると、全体の６割近くなる。親が先生代わりにならないと、たいていの子は家庭学習に自発性は示さないのがこの年齢なのであろう。

また図33は、さらにその具体的内容である。子どもに勉強をもって来させて、その間違いなどをチェックしてやる積極的な親が３割、もっと積極的に先生のような役割をとって教える親が１割。ただし「ときどきある」も含めるとその数字は７割と４割にも達する。一人ひとりの子の後に親という「家庭教師」がついている状況に近いと表現してよいかもしれない。

図34によれば、親に「勉強を教えて」と言って来る子は「ときどきある」も含めると56%にも達し、２年生という学年が改めて浮かび上がってくる。

ではこうした子どもの期待に応えて、子どもに勉強を教えられる親は、果たしてどのくらいいるのだろうか。図35が示すように、「十分自信がある」親はそれほど多くはないが、「まあある」を含めると全体の９割がこれを肯定している。全部の親が、この学年では家庭教師がつとまるレベルにあるのだろう。なお、図36はそれぞれ具体的な内容についての自信を示したものである。

図32　親が勉強をみてやるか

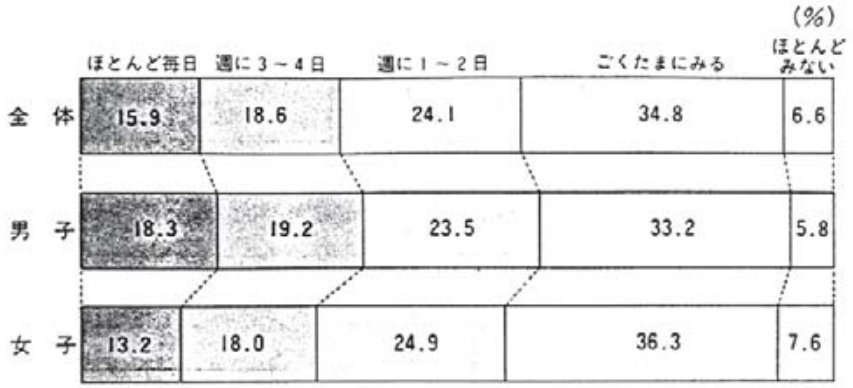


図33　親が勉強をみてやるとき

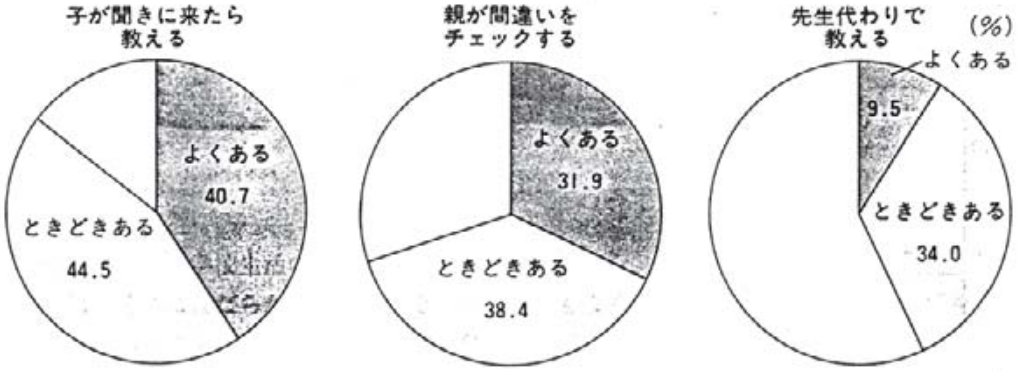


図34　子どものほうから教えてくれと言うか

図35　親が教えられる自信

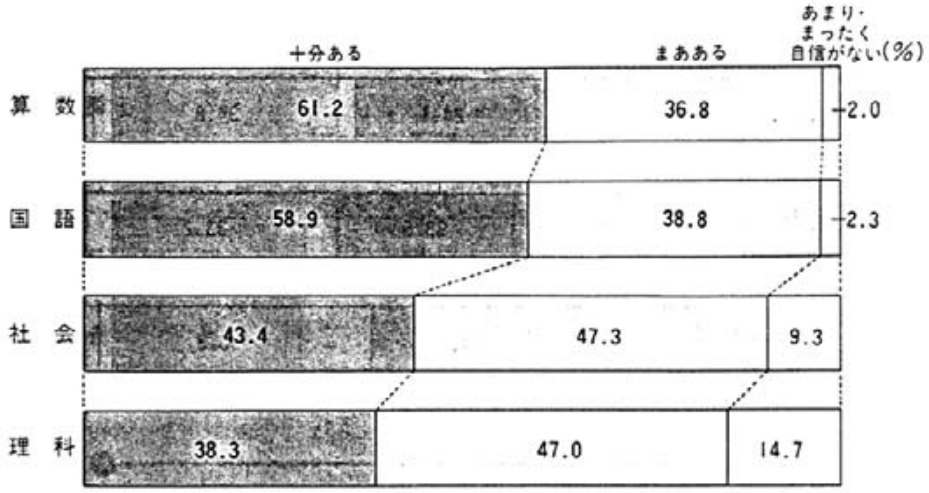
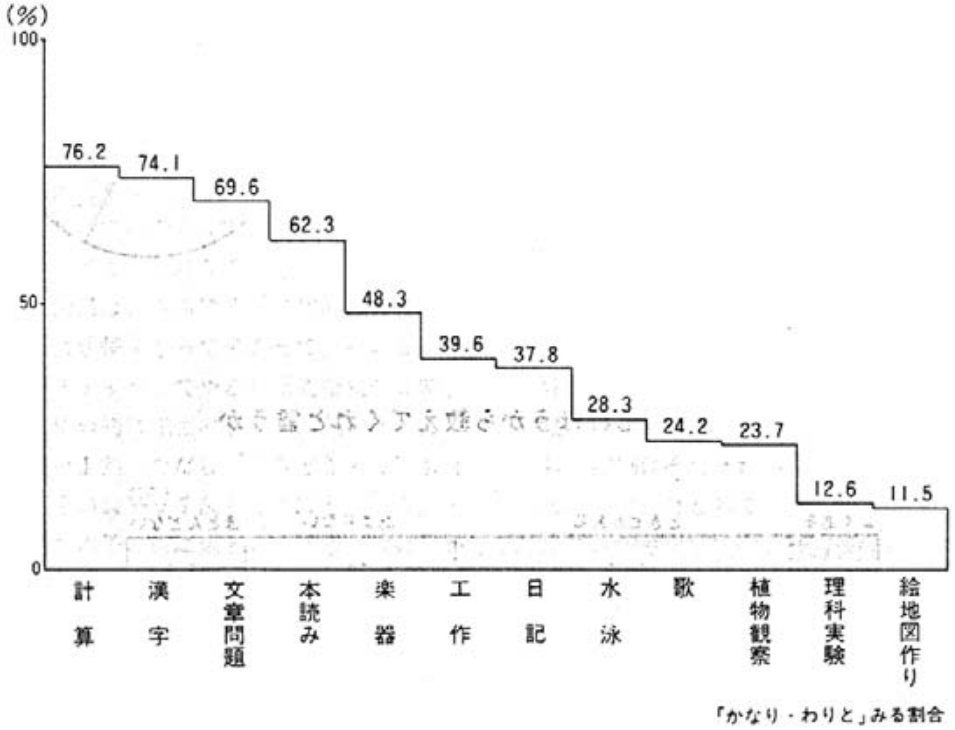


図36　親がみてやる勉強



4. 友だちと遊び

子どもにとって学校生活の楽しさのかなりの部分は、そこに友だちがいるからだと推測されよう。巻末の集計表によれば、本サンプルの9％は一人っ子、62％が二人きょうだいだから、子どもたちが友だちを求める気持ちもよくわかる。本章では友だち関係をまず見ていくことにしよう。

仲良しの友人

まず図37は「仲良しの友人」の数である。図が示すように3～5人が55％と標準的であり、巻末の集計表によると6人以上の多数の友人を持つ子は、男子のほうにやや多くなっている。

また図38によると、そのうち「一番の仲良し」については、全体の8割は同じクラスの子であり、図39によると小学校入学以前からの仲良しは26％で、あとは今のクラスになってから（2年生はほぼ持ち上がりクラス）である。さらに図40によれば、その一番の仲良しとは、7割が学校でも家に帰ってからも遊んでおり、図41によれば、母親同士多少なりと行き来があるのは、半数でしかなく、4割はあいさつ程度のつきあいしかしていないのは、大都市の特殊性か。

図37　仲良しの友だちの人数

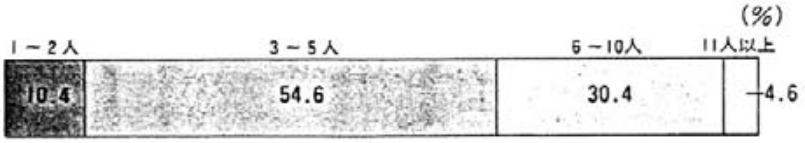


図38　一番仲良しの友だちはどんな子か

図39　仲良しの友だちといつから仲良しか

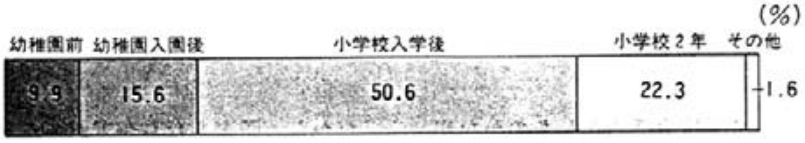


図40　仲良しの友だちと遊ぶとき

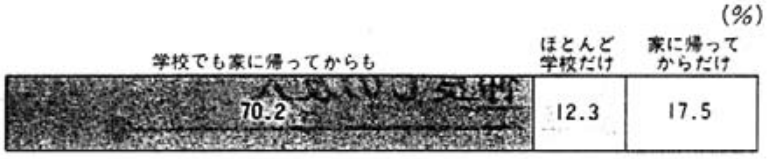
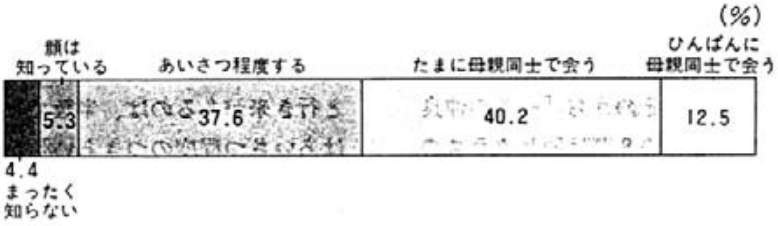


図41　母親同士のつきあいの程度



放課後に遊ぶ子

さて、次に「家に帰ってから遊ぶ子」について見てみることにしよう。子どもが友人とのつきあいを、学校場面に限っているという話はよく聞くが、果たしてそうだろうか。

図42は家に帰ってから遊ぶ友だちの人数である。図が示すように、家に帰ってから遊ぶ友だちを1人も持たない、または1～2人しか遊ぶ子がいない子はごくわずかで、3～5人いる子が36%、6～10人いる子が46%にも達している。この年齢では家に帰ってからの友人もけっこういることがわかって、少しほっとさせられる。しかし図43が示すように、その中で「よく遊ぶ友だち」に限ると数はぐっとへってしまう。よく遊ぶ友だちを持たない子も6%、1人が13%で、2～3人が53%と一般的な姿である。そして集計表によれば、女子のほうがその数が少ない。

これを年齢の上下と性別で見たのが図44である。やはり同学年が圧倒的で、年上年下は非常に少なく、半数が0人と答えていることがわかる。また性別でも、異性でよく遊ぶ友だちはすでにこの学年で非常に少なくなっており、3分の2が0人と答えているのは困ったことではなかろうか。

さて図45と図46は、帰ってから友人と遊ぶ頻度とその主な場所を示したものだ。帰宅後も「ほとんど毎日」友だちと遊ぶ子は、男子の38%、女子の23%で、「週に3～4回」を加えると、7割はかなり子どもらしい放課後を過ごしているということになりそうだ。ただし問題はその内容である。外でのびのびと遊ぶ姿があればいいのだが。これと関連して図46は、遊ぶ場所である。1位が公園とグラウンドだが、2位、3位は友人と自分の家である。放課後友人と遊ぶといっても、それが「ファミコン」を中心にした室内遊びなのかもしれないのである。この点を次に見てみよう。

図42　家に帰ってから一緒に遊ぶ友だちの人数

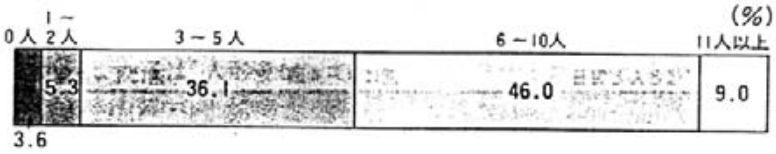


図43　家に帰ってからよく遊ぶ友だち

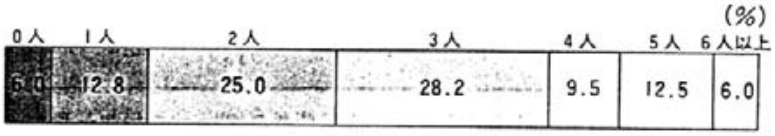


図44　家へ帰ってから一緒に遊ぶ友だち

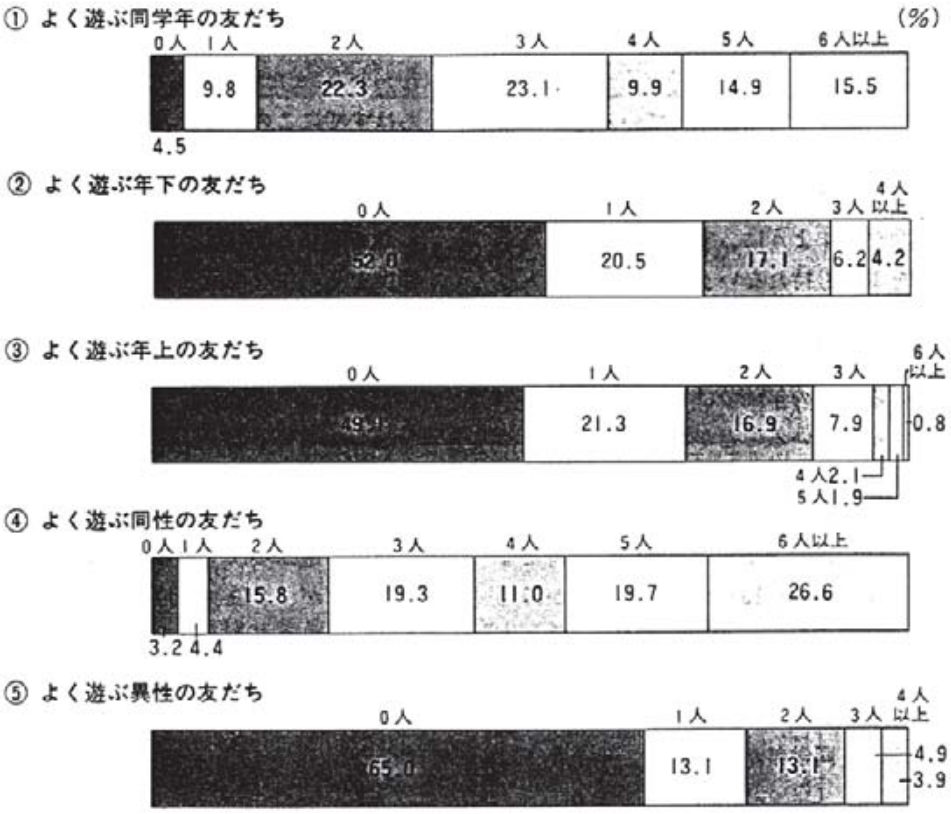


図45　家に帰ってから一緒に遊ぶ友だちと遊ぶ頻度

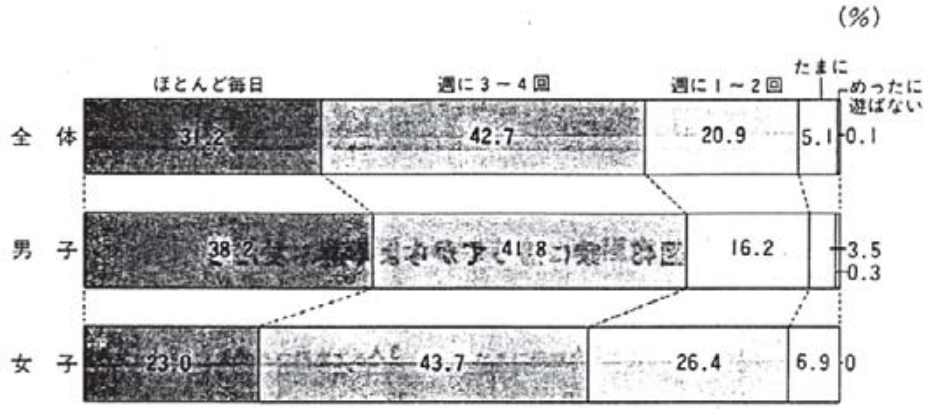
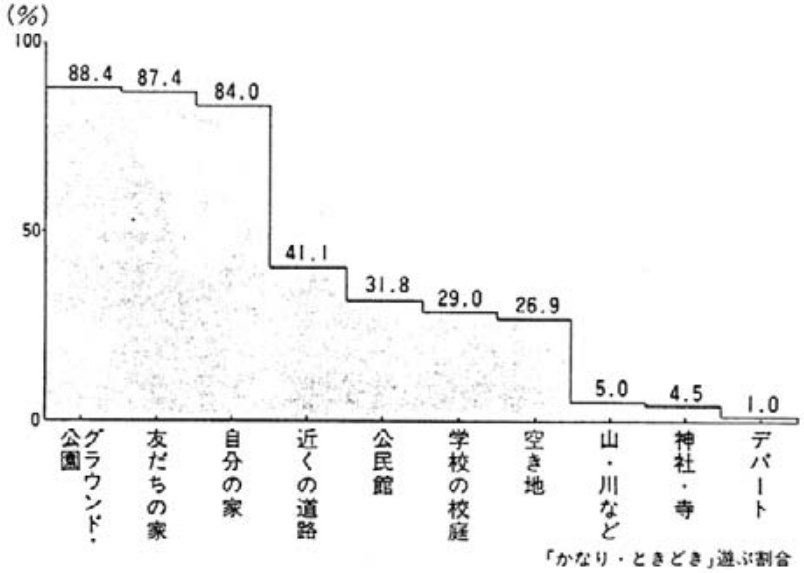


図46　家に帰ってから友だちと遊ぶ場所



何をして遊んでいるか

子どもは放課後何をして遊んでいるか。自由記述の欄を手集計したのが、巻末の付録(1)(2)(3)(4)(6)である。なお集計の都合上無作為に抽出した男子116名、女子111名の結果である。

まず付録(1)の室内遊びでは、ダントツに男子は「ファミコン」、女子は「人形遊び」である。次に外遊び（付録(2)）は、男子で「サッカー、野球」、女子は「なわとび、ボール遊び」。この年齢ですでにかなりの性差が見られる。次にひとり遊びの種類は、男子で「ファミコン、読書、絵を描く」などの室内遊びが、女子では「絵を描く、読書、人形遊び」が上位にあがっている。

次に付録(4)は、友だち遊びの内容である。おもしろいことに男子ではこれが(2)の外遊びとほとんど一致して「サッカー、野球」が上位にきているのに、女子の友だち遊びは「なわとび、ボール遊び」ではなくて、「人形遊び、ごっこ遊び」で、やっと3位に「ボール遊び」が出てくる。男子は友だち遊びと言えば外遊び化するが、女子が逆に室内遊びになるのはなぜだろう。また男子の友だち遊びの3位に「ファミコン」があがってきているのも、注目される。

さて付録(6)は、今2年生が熱中していることである。

男子は「ファミコン、プラモデル作り、野球、サッカー、水泳、シール集め」が6位まで、女子は男子に比べ分散していて、その種類が多く、集中する項目が少ないのが特徴であり、「ピアノ、読書、絵を描く、水泳、なわとび、そろばん」の順序になっている。

5. 親子関係

親子の接触

まず全体としての親子関係について見てみよう。図47に示したように、父子関係、母子関係とも「とてもいい」「かなりいい」を合わせて全体の約半数がよい親子関係だと言っていて、この時点で「よくない」としている親はごくわずかである。

さらに図48は親子の接触時間である。母親との接触のほうは「まあ」も含めて「十分」が8割、父親は6割弱となっている。しかし思ったよりは父子間の接触を十分と答える者が多いように思われる。

次に図49は、そうした親子の間で話し合われる話題についてである。「親のほうから聞くようにしている」「聞かなくとも子どものほうから話すことが多い」「半々」「そうした話題については話さない」に分けてみると、図が示すように①全体としては女子のほうが聞かれなくてもよく自分から親に話している。②とくに男子は、勉強や学校、先生、塾などのことについては親のほうで聞かないと自分からはあまり話していない。③子どもが一番自分から話したがるのはマンガについてである。④ニュース、スポーツ、スターのうわさ話などを、この年齢の親子間で話し合うことは少ない。などの傾向が見いだされる。

また図50、図51、図52は、親子が一緒にしていることについて聞いたものである。図50によると、全体として母子間での接触は父子間に比べてかなり多くなっている。と言っても、朝食を毎日一緒に食べる母子が7割しかいないという数字には、少し首をかしげたくもなる。共働きの増加がもたらした傾向なのか、それとも母親がそうしたことを、それほど大切と考えなくなってきているためなのだ

ろうか。また入浴は、この年齢では異性の子どもであってもとくに配慮はなく、2つの数値に大差がないのはおもしろい。

また「毎日15分以上話す」親子の割合は、母子間では83%もいるのに父子間では、28%と極端に少なくなっている。父親の5割が、15分以上子どもと話す時間を週に1～2回以下しか持てないという数値に、改めておどろかされる。

図51は日曜日の食卓の状況である。さすがに日曜はかなりの家の食卓に、両親が顔をそろえることがわかる。最近、日曜日に思ったより子どもが友人と遊ばなくなってきているように思われるが、この数字を見ていると、平日は第一、第二の学校にしばられ、日曜は家庭にしばられる現代っ子の姿が浮かび上がってくる。このことは図52からも言えそうである。

図47　親子関係について

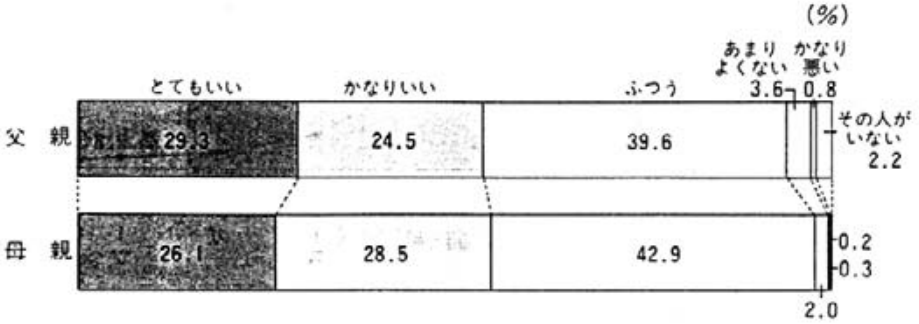


図48　接触時間は十分か

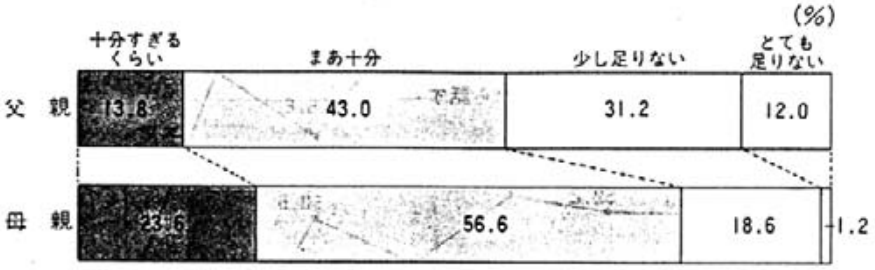
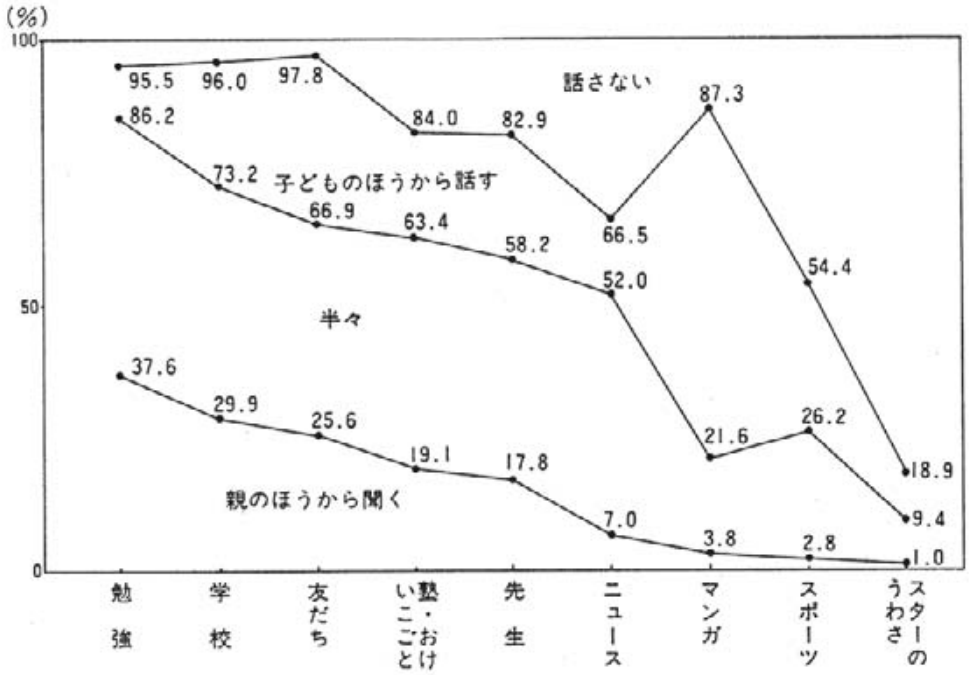


図49　子どもと話すこと(どちらから切り出すか)

(男子)



(女子)

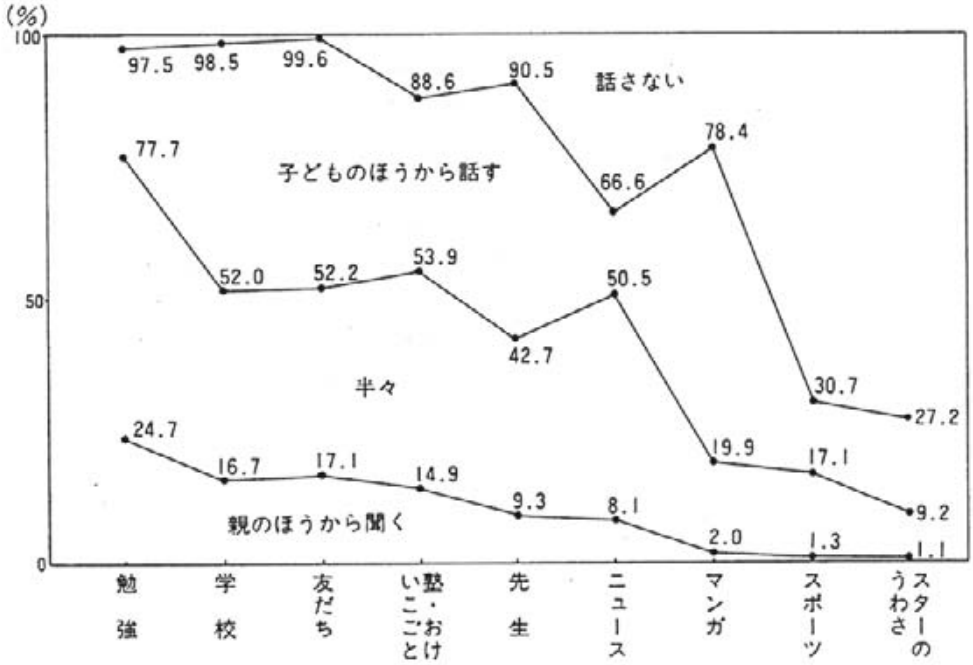
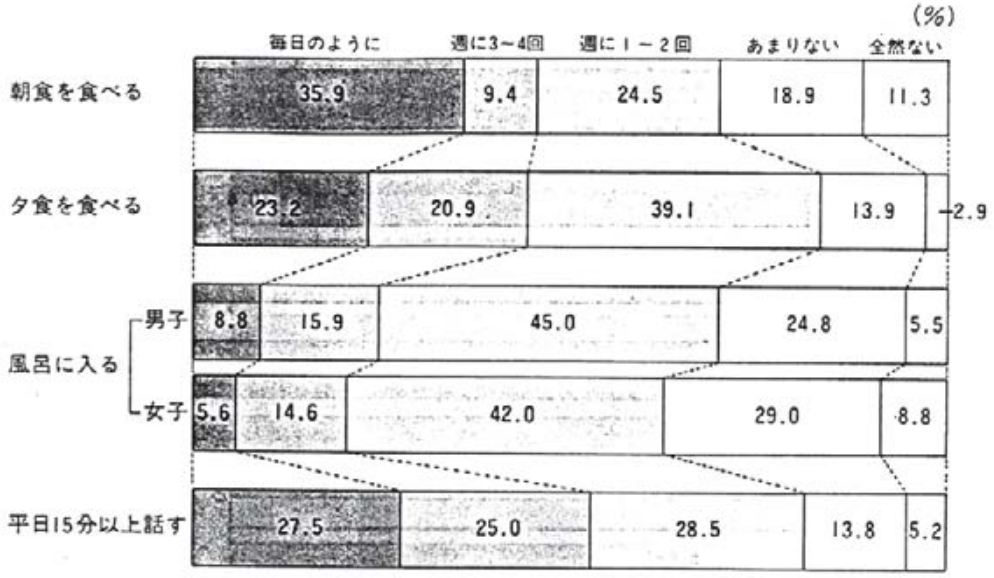


図50　父親と一緒にすること(平日)



母親と一緒にすること(平日)

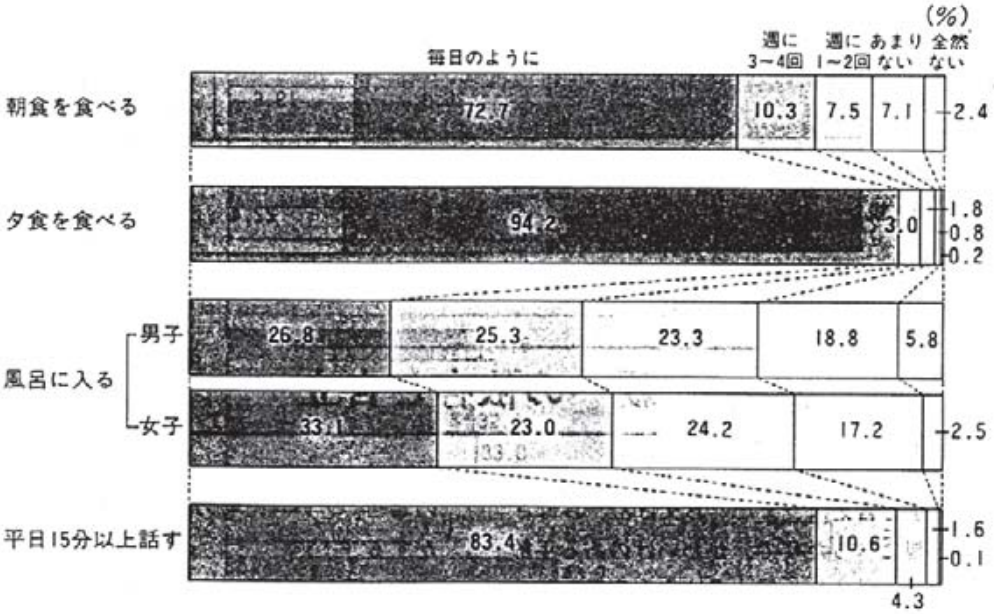


図51　日曜日の食卓(ほとんど一緒の割合)

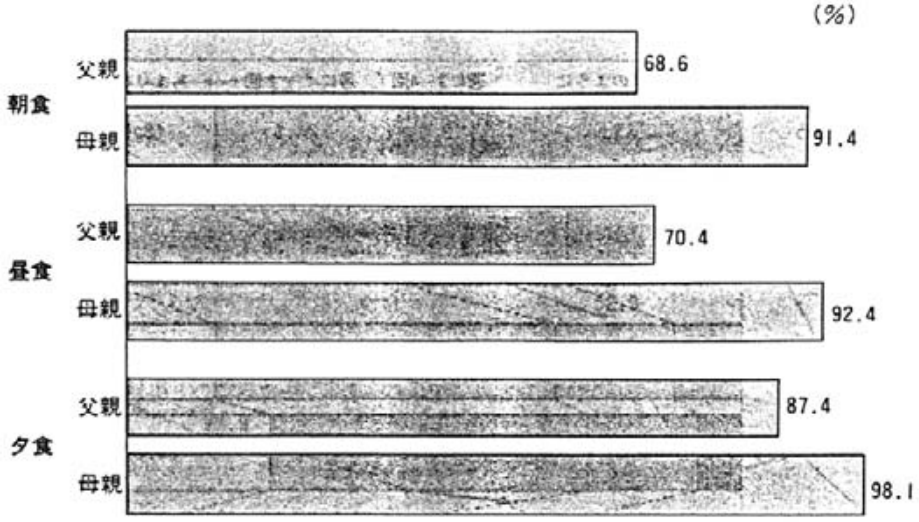
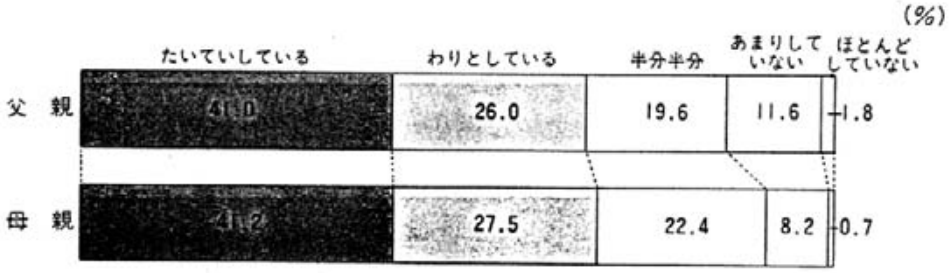


図52　日曜日一緒に遊んだり話をしたりするか



親への依存と自立

2年生と言えば、まだ「お父さん、お母さん」と親にべったりで、かわいげのある年齢のようにも思うし、早い子はそろそろ人前で親を避けたり恥ずかしがったりをし始める年齢かもしれない。図53はこの点を見ようとしたものだが、全体として、まだこの年齢の子が親離れしていない様子がよくわかる。男子に比べると女子はとくにその傾向が強く、このくらいの年齢の子、とくに女の子をもつ親の幸せ、といったものが想像できるような気がする。

また図54は、子どもに現在「安心して任せられること」をたずねてある。この年齢になるとそろそろ子どもに任せられること（手伝い）が増えてくる。昔だったらかなり十分に家族の一員として、家事を支えた子もいたのではなかろうか。

図53　親への依存

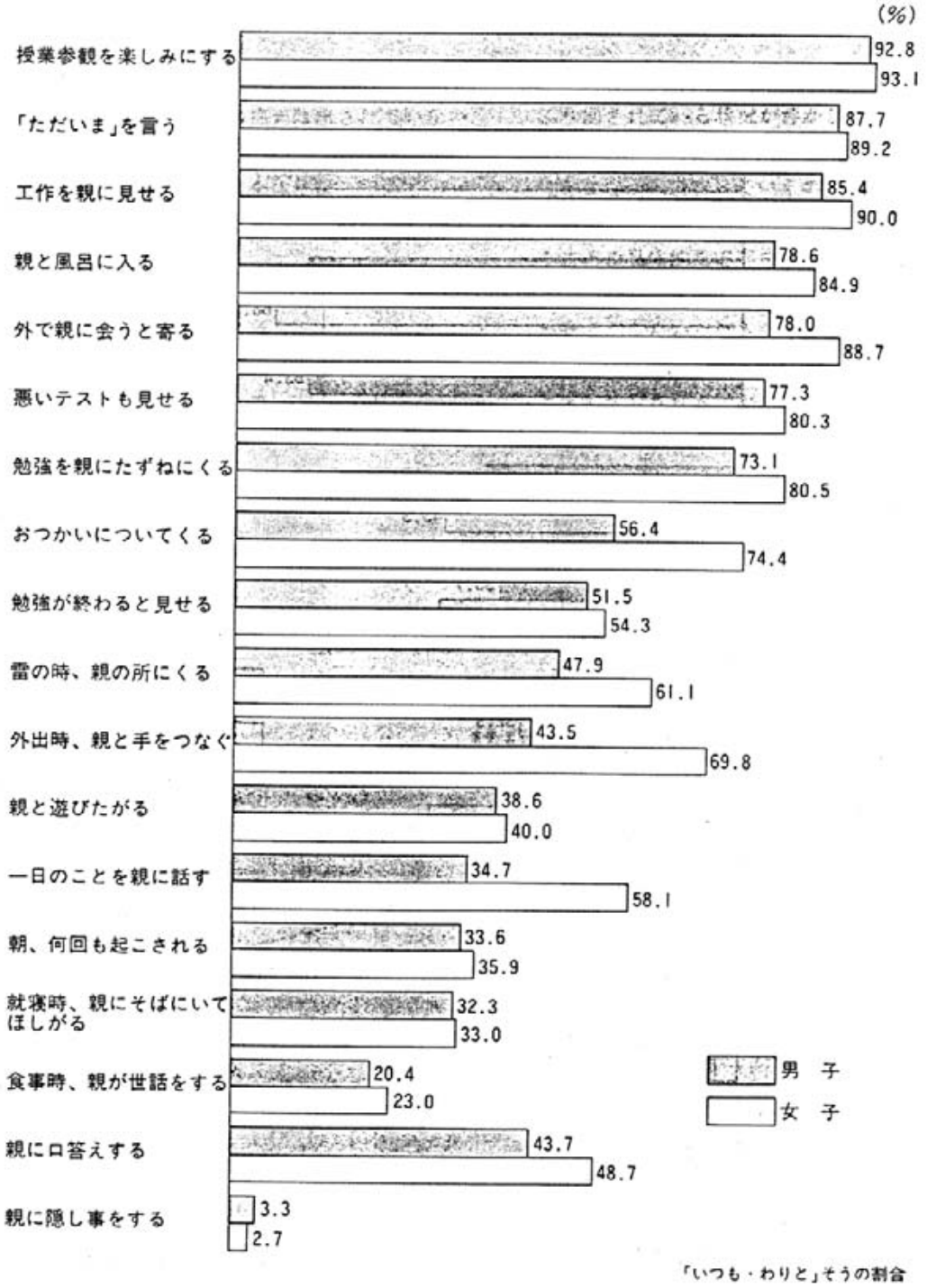
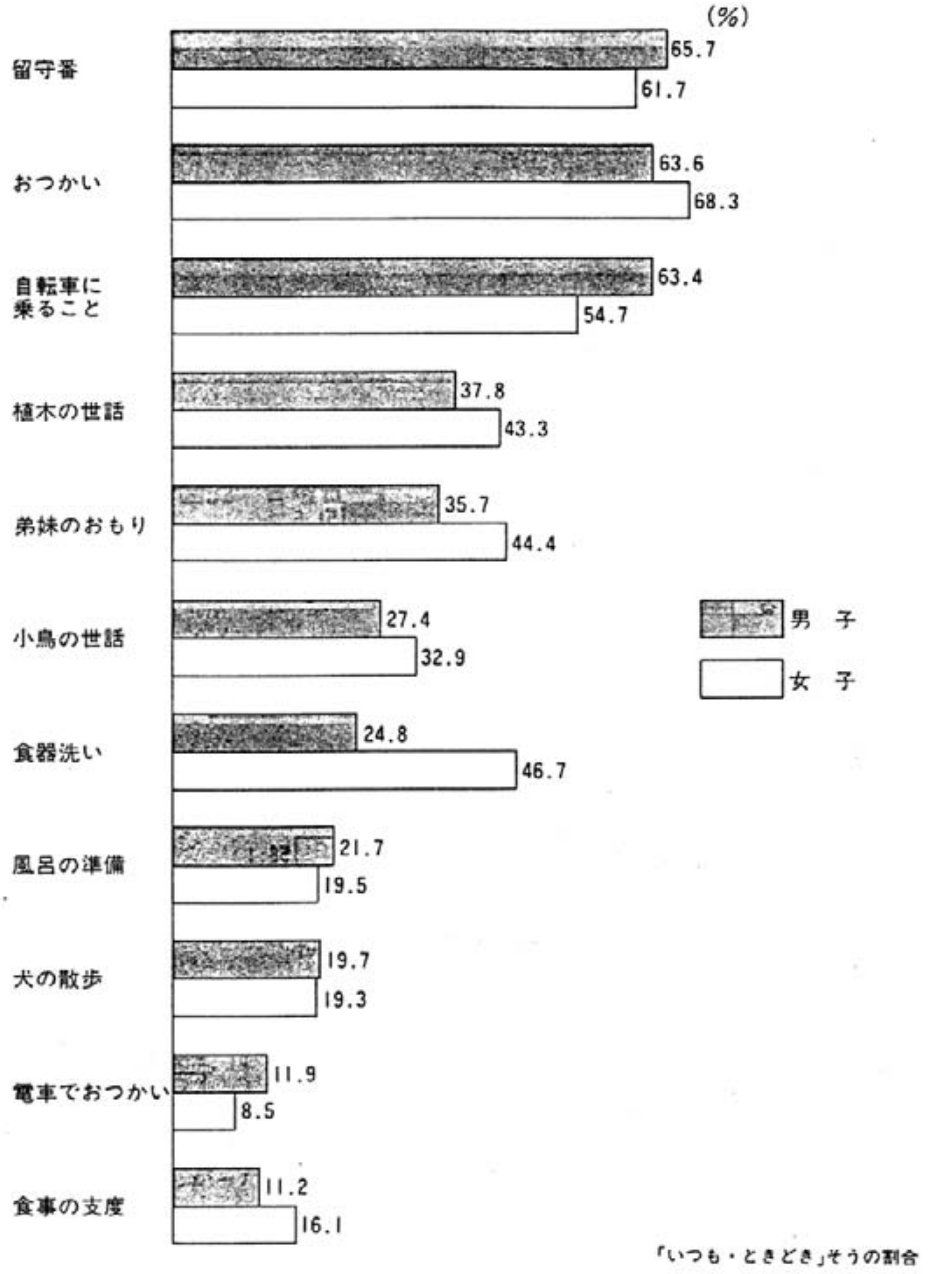

(%)
授業参観を楽しみにする
92.8
93.1
「ただいま」を言う
87.7
89.2
工作を親に見せる
85.4
90.0
親と風呂に入る
78.6
84.9
外で親に会うと寄る
78.0
88.7
悪いテストも見せる
77.3
80.3
勉強を親にたずねにくる
73.1
80.5
おつかいについてくる
56.4
74.4
勉強が終わると見せる
51.5
54.3
雷の時、親の所にくる
47.9
61.1
外出時、親と手をつなぐ
43.5
69.8
親と遊びたがる
38.6
40.0
一日のことを親に話す
34.7
58.1
朝、何回も起こされる
33.6
35.9
就寝時、親にそばにいてほしがる
32.3
33.0
食事時、親が世話をする
20.4
23.0
親に口答えする
43.7
48.7
親に隠し事をする
3.3
2.7
男　子
女　子
「いつも・わりと」そうの割合

図54　子どもに安心して任せられること



子どもに手を焼いている部分

2年生と言えば、まだ親の子育てが成功したか失敗したか、その答えは出されていないだろう。しかしここで一応の採点をしてもらったのが図55である。全体には「まあまあ」の反応が多いが、うまくいっていない順に見ると、

1．しつけ
2．成績
3．性格
4．健康

となっていて、成績はともかく「しつけ」にふり回されている状況が浮かび上がってくる。この数字はおそらく学年が進むにつれて、1位と2位が入れ替っていくのではなかろうか。

さらに図56は、現在親が子どもに望んでいることの具体的な内容を明らかにしたものである。自由記述をまとめた付録(9)の内容と合わせてごらんいただきたい。図56ではすでに勉強に関する項目が上位に上がってきていることも注目される。

図55　これまでの子育てについて

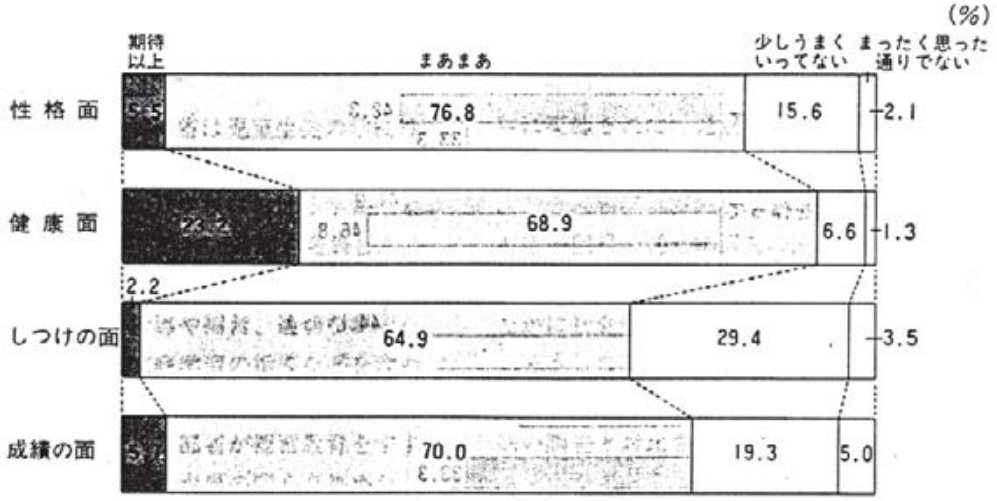
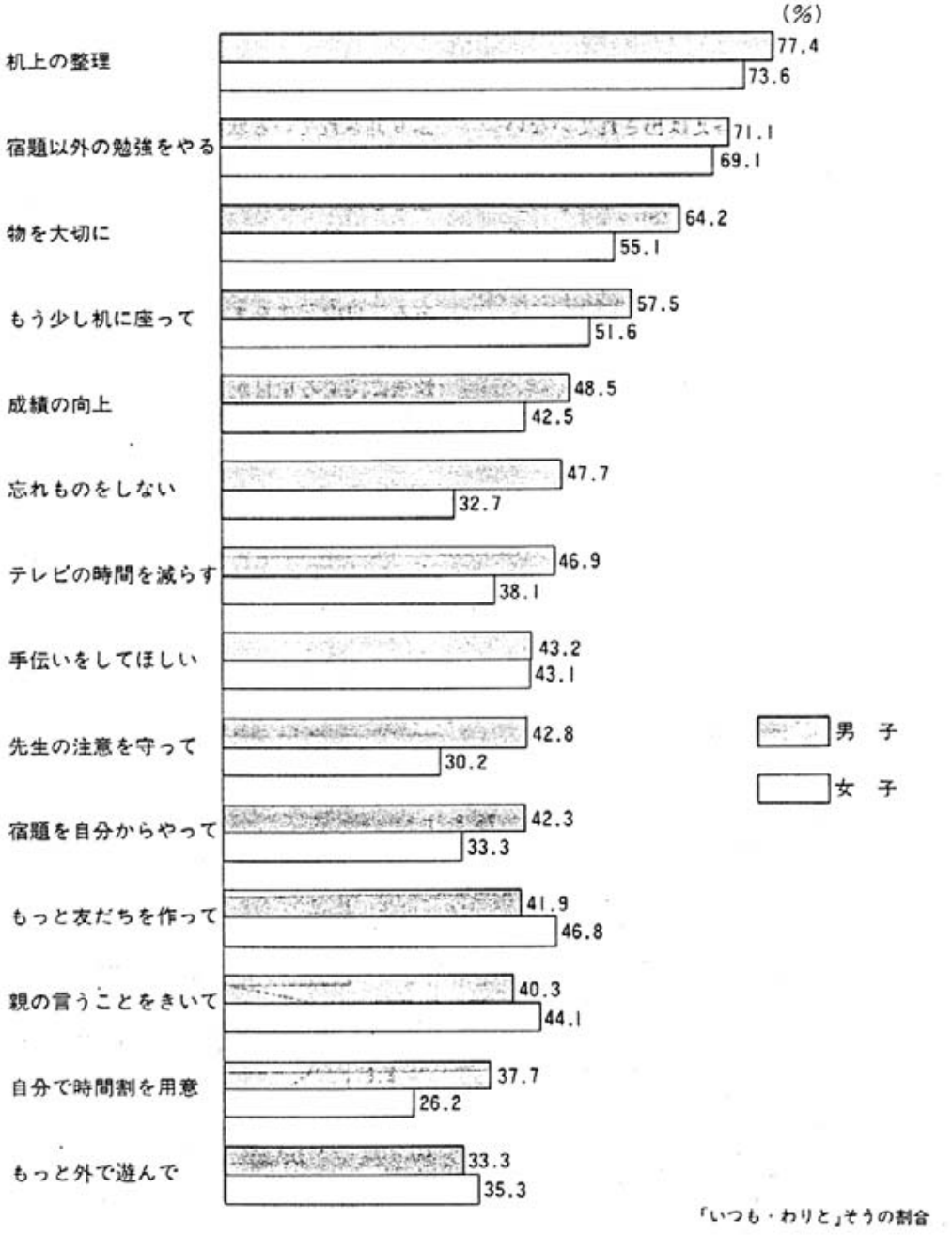


図56　親が子どもに望むこと



※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。